分 析

物質	Mg ₂ P ₂ O ₇	P	P %
Gef. 0.2144g.	0.0483g.	6.0135	6.29
Ber. $\text{C}_{27}\text{H}_{45}\text{O}$ $\begin{array}{c} \text{HO} \diagup \text{P}=\text{O} \\ \text{HO} \diagdown \end{array}$			6.65

Phosphit 竝に Phosphat は HgCl₂ に依つて容易に區別せらる即ち前者は熱時直に白色 HgCl₂ を析出するも後者は透明に止まる。

IV. 之等誘導體の反應.

881 頁參照.

(愛知醫科大學豫科化學教室に於て)

常 山 考

藥 學 士 木 村 康 一

K. Kimura: On "Zyozan" or "Ch'ang Shan", a Chinese drug.

緒 論

常山は漢法醫流に於て截癰解熱劑たり。之が原植物として芸香科 *Rutaceae* のコクサギ *Orixa japonica*, Thunb. を充て來れり。事實コクサギの生葉の如きは我が民間に用ひられたるが如し。而して本草綱目其の他の諸文獻によるも亦市場に於ける常山のコクサギとは全然別物なる事によるも亦コクサギの本邦特産なる事實によるも、漢藥常山の原植物としてコクサギを充つる何等の根據を見出さず。却て虎耳草科 *Saxifragaceae* の *Dichroa febrifuga*, Lour. (印度, 交趾支那, 四川, 雲南等に産し本邦には之を見ず) の常山の原植物として有力なる事實を此處に論じ併せてエイクマン Eykmann が常山即ちコクサギとしてベルベリンを報告せるものは全くコクサギにも非ず又常山としては誤物なるメギ科 *Berberidaceae* のメギ *Berberis Thunbergii*, DC. 或はナンテン *Nandina domestica*, Thunb. に類する植物に因れるものなる事を述べんとす。

文 献

漢書 既に神農本草經にその氣味, 主治等を記せり。而して漢書に就ては中尾萬三氏が著者の爲めに特に寄せられたる 常山, 蜀漆, 產地考に詳なるを以て此處には單に本草綱目に載する一部を引くのみ。

本草綱目(李時珍) 1603 17卷 上 36丁ヲ。

常山本經下品蜀漆同上〔釋名〕恒山吳晉互草本經鷄屎草日華鴨屎草日華〔時珍ノ曰ク〕恒ハ亦常也恒山ハ乃チ北岳ノ名ニシテ今ノ定州ニ在リ常山ハ乃チ郡ノ名ニシテ亦今ノ眞定ナリ豈ニ此ノ藥始メテ此ニ産シテ名ヲ得タラン歟蜀漆ハ乃チ常山ノ苗ニシテ功用相同ジ今併セテトナス。

〔集解〕〔別錄ニ曰ク〕畧ス〔弘景ノ曰ク〕常山ハ宜都建平ニ出ヅ細實アリ黃ナル者ヲ呼デ鷄骨常山ト爲ス之ヲ用フルニ最モ勝レリ蜀漆ハ是レ常山ノ苗ニシテ出ル所又異ル者ナリ江林山ハ即チ益州江陽ノ山名ナリ故ニ是レ所ヲ同クスル爾ミ彼ノ人采得テ榮結シテ丸ト作ス時ヲ得テ燥ク者佳ナリ〔恭ノ曰ク〕常山ハ山谷ノ間ニ生ズ莖圓クシテ節アリ高キ者モ三四尺ニ過ギズ葉ハ茗ニ似テ狹長兩兩相當ル二月ニ白花ヲ生ズ青萼アリ五月ニ實ヲ結ブ青クシテ圓ク三子房ヲナス其ノ草暴燥スルトキハ色青白ニシテ用ニ堪エタリ若シ陰乾スルトキハ便チ黑爛鬱壞ス矣〔保昇ノ曰ク〕今金州房州梁州中江縣ニ出ヅ樹ノ高サ三四尺根ハ荊根ニ似黃色ニシテ破ス五六月ニ葉ヲ采リ蜀漆ト名クル也〔李含光ノ曰ク〕畧ス〔頌ノ曰ク〕今汴西淮浙湖南州郡ニモ亦之レ有リ並ニ上説ノ如シ而シテ海州ニ出ヅル者葉嫩葉ニ似タリ八月花有リ紅白色子碧色山楝子ニ似テ小ナリ今天臺山ニ一種草ヲ出ス上常山ト名ク苗葉極テ甘シ人用テ飲トナス甘味蜜ノ如シ又蜜香草ト名ク性涼ニシテ人ヲ益ス此ノ常山ニ非ル也リ

常山〔氣味〕苦寒にして毒あり云々蜀漆〔氣味〕辛平にして毒有り云々 即ち(1) 弘景の曰ふ宜都建平に出づる細實ありて黃なるもの所謂鷄骨常山、(2) 恭の曰ふ山谷の間に生じ莖は圓くして節あり高くも 3-4 尺、葉は茗(茶)の葉に似て狹長對生し、

2 月に青萼を有する白花を生じ 5 月青くして圓き三房の實を結び、其の草は暴燥すれば青白となり、陰乾すれば黑爛鬱壞するもの及び(3) 頌の曰ふ汴西淮浙等にも産する上説の如きもの、他海州に出づる葉が楸(紫葳秋 *Bignoniaceae* のキササゲ *Catalpa*) に似て 8 月紅白色の花を着け 碧色の果實を結ぶ所謂海州常山の三にして尙頌の曰へる土常山はその述ぶる如く 別物にして今日一般に 虎耳草科 *Saxifragaceae* のアマチャノキ *Hydrangea Thunbergii*, Sieb. を充てあまぢやとして用ひらるるもの、又胡先驪及び陳煥鑄：中國植物圖譜第 1 卷(1927) 第 28 圖によれば *Hydrangea aspera*, Don. に充つるものにして本稿に於ては之を論ぜず、又別に研究する所あるべし。

和書 本邦に常山の傳はりたるは既に支那より本草の齎されたる初めにありし事 本草和名(深江輔仁) 898-923A.D. 上冊 42 丁ヲに誌す所によつて知るべし即ち：一

蜀柒藥 恒山苗也一名恒山角(出釋藥性)和名久佐岐一名也末宇都岐乃波

恒山 一名互草(楊玄操音胡故反)鷄骨恒山(細實黃者)一名七葉(出藥性)和名久佐岐一名字久比須乃以比禰

和名鈔 (源順) 923-930A.D. 卷 20 の 25 丁

蜀漆 和名久佐木 一云夜末宇豆木乃禰

之によつて見るに蜀漆或は恒山即ち常山に和名を附してクサギ・ヤマウツギ又はウ

グヒスノイヒネとなす。而して是等の和名は果して邦産の植物の名稱なるや否やは斷定するを得ず。或は支那より渡來の者に此の如き名稱を附したるには非るか。又和産の植物名を以て充てたりとするも必ずしも是等の名が今日の同名の植物をさすものとは云ひ難し。然れども海州常山の記載が馬鞭草科 *Verbenaceae* のクサギ *Clerodendron trichotomum*, Th. に相當し得るを以て本草和名等にいふクサギは今日のクサギに相當し海州常山をいふには非るか。而してヤマウツギ及びウグヒスノイヒネは恐らく別種の常山即ち弘景或は恭の曰へる常山をいふものにして既に當時傳へられたる常山が一種に非りしものと考へ得べし。而して本草綱目の本邦に傳へらたて(1608)後續々とあらはれたる我が本草書にはコクサギ・ヤマアデサイ・アデサイ等の和名をあけて益々常山の原植物に混亂を來したり。即ち：—

本草和解(大江願軒) 1697 第 5 卷 26 丁ヲ

常山 〔氣味〕苦寒有毒一日辛微寒一日大寒〔異名〕略す〔和名〕夜摩阿地左伊 古久左義〔修治〕〔中略〕往古ヨリ久左義ノ根ヲ用ユ本草ニ葉ハ楸ニ似テ 8 月ニ紅白色ノ花ヲ開キ碧色ノ子ヲ結ブトイヘリ似タル物ナレドモ 葉ノ形チ久左義トハ別ナリーニ曰フ葉ハ茗ニ似テ狭ク長シ 2 月ニ白花アリ 5 月ニ子ヲ結ブト云フ是ハ各別也—ニ曰フ花ノ白キ阿地左伊ノ根ヲ用ユト云々(以下略す)

而して二種の粗なる附圖に説明に(1)鶏骨常山最モ佳ナリ 色ハ淡黃(2)市ニ常ニ充ツルモノ之ヲ食ヘバ人ヲ損フ色褐ニシテ多刺と。即ちここに和名にコクサギとヤマアデサイを見る。而して圖の(2)に記すものは本草書には全く見ざる異物なる事を知る。

和語本草綱目(岡本爲竹) 1698 第 9 卷 51 丁ヲ

常山 (前略)〔修治〕〔前略〕常山。今清ヨリ渡ル所ノ者ヲ佳トス。一説ニ和ニ謂ル。クサギノ根ヲ以テ常山トス誤リナリ。或ハ和ニ謂ル。アデサイヲ以テスルモ亦タ非也。或ハ和ニ謂ル小クサキ也ト。小クサギハ即チクサギヲ截リタル跡ニ生ズル嫩苗ナリ。此ノ説大槩本艸ニ近シトイヘドモ未ダ是ナラズ。惟ダ清ヨリ渡ル所ノ者ヲ用ユベキノミ。(後略)

之によれば小クサギはクサギの嫩苗を呼ぶものにして特にコクサギといふ植物をさせるものには非るが如し。而して注意すべきは結局和産を否定せる事なり。

大和本草 (貝原益軒) 1708 第 11 卷 5 丁ヲ

常山にクサギ及びコクサギの 2 種ありとし、クサギは頃の曰ふ海州常山をさし、コクサギは泰の曰ふものにあて。

コクサギハ鞍馬山・伊勢ノ淺間山ノ北ノフモトニ多シ其他處々ニアリ臭梧桐(クサギ)ハ木也高シ小クサギハ草ニ似タル小木也ヒキシ本草ニハ二種ヲスヘテ常山トシテ毒草ノ部ニ入タリ二種同名異物也二物共ニ常山ナリ云々

と云ひてコクサギとクサギを區別し尙

山アヅサイヲ常山ト云人アリ非也山アヅサイトハ花ノヒトヘナルアヅサイ也別物ナリ

と云つてヤマアヅサイを否定せり。

袖珍本草集 (松岡玄達) 1790 117 丁ヲ

常山 本經下品〔釋名〕常山道中ニ生ズルニ因ル故ノ名ナリ、蜀漆蜀中ニ生ズル常山ノ苗ナリ探時莖内汁有リテ漆ノ如キ故ノ名ナリ(中略)和名クサギ〔集解〕(略)〔選用〕和漢俱ニ之ヲ用フ形鶏骨ノ如ク色鶏子ノ黄ノ如キ者佳ナリ 5月葉ヲ採リ陰乾ス蜀漆ト名ク和ノ人阿津佐伊ヲ以テ蜀漆ニ充テ以テ瘡ヲ截ル之ヲ試ムルニ多ク效ヲ得亦常山ノ種類也(漢文)

此處に於て常山は更にアヂサイを得たり。

本草綱目啓蒙 (小野蘭山) 1803 第 13 卷 12 丁ヲ

コクサギを常山とし、クサギ及びヤマアヂサイの根を黄染して賣るは非にして唯だ蜀漆には海州常山即ちクサギの苗を用ふべしとなす。

有毒草木圖說 (清原重臣) 1827 後編 7 丁ヲ

常山として圖示せるものは明かに今日のコクサギ即ち芸香科 *Rutraceae* の *Orixa japonica*, Thunb. なり。

大體以上の如くにして明治に入り、遂に我が藥學教室に教師たりし和蘭人 J. F. Eykmann は常山の成分の研究を試み(明治 16 年(1883)大學紀要第 10 卷 40 頁)其内にベルベリン Berberin を發見す。その植物的記載は本草綱目啓蒙によれる如く、常山の原植物として確定的にコクサギ *Orixa japonica* をあぐ。之が 1884 年には我が藥學雜誌(32) 385 或は Nederl. Tijdschr. Pharm. 228 等に轉載され、それより C. Wehmer: Die Pflanzenstoffe, Jena 1911, 393 等に採用され來り、一般に常山の原植物はコクサギにしてその成分はベルベリンなりとする根本をなすが如し。

洋書 洋書を見るに Eykmann 以後は上記の誤に禍さると雖もそれ以前に於ては全く *Orixa japonica* の片影だも認むるを得ず。而して洋書に常山のあらはれたるは恐らく J. Loureiro: Flora cochinchinensis, 1790, P. 361. を以て最初とすべし。尤も Loureiro は單に Sp. 1. *Dichroa febrifuga*: α Cáy Thuong fon. β Châm Châm とのみ記して常山といふ漢字を用ひざれど常山を Châm Châm 或は Ch'ang Shan 等と發音さるゝ事は想像さるべし。而して *Dichroa febrifuga* の植物的記載をなし又熱病に用ふる事を記せり。*D. febrifuga* は又全く漢藥とは別個に印度の藥用植物を圖説せる Kirtikar & Basu: Indian Medical Plants, Ps 530. Pl. 402. にその異名・產地・形態等を記し且つネパール人 Nepalese は解熱にその根の皮及び枝根を煎じて用ふといへり。而して *D. febrifuga* は其の形態的記載が前に記す恭の曰へる常山に極めてよく相似たる事を知る。即ち：—

常綠灌木高サ 5-9 呎、多少竿ノ様ニ細長シ。皮ハ黃色ニシテ薄片トナツテ剥

落ス。材ハ白ク比較的硬シ。若キ枝條及ビ花梗ニ短軟細毛ヲ生ズ。葉ハ對生、3-8 吋、披針狀ニシテ葉身 3-8、長サ $\frac{1}{2}$ -1 吋ノ葉柄ニ次第二合シ、葉脈上ニ細毛密生ス。時ニ又圓ケレドモ一般ニ狭ク、或ハ倒卵披針形ナリ。花蓋 5-6 個、厚ク長サ $\frac{3}{16}$ 吋。 $\frac{3}{4}$ 下生子房、胚珠ハ多數ニシテ 3-5 ノ側膜胎座ニ着ク。漿果ハ最後ニツヤノアル濃青色ヲ呈スルニ至ル。

而して花の色を調べるに白色なるものより淡紫紅色のもの普通なるが如し。此處に於て *D. febrifuga* はその形態・產地・用法等よりして漢藥常山の原植物として甚だ有力なるを知る。尙其他の洋書：—

E. Bretschneider: Early European researches into the flora of China S. 150, ♀ 202, (1880)

E. Bretschneider: Botanicon Sinicum. Part III, 294, (1895)

Eon. Perrot et Paul Hurrier: Matériamédicale et Pharmacopie Sino-annamites 156, (1907)

G. A. Stuart: Chines Materia Medica 292, (Shanghai, 1911)

等に常山又は白常山草として *D. febrifuga* を見る。其他屢々擧げらるゝは *Hydrangea* Sp. にして、*Dichroa* と同じ虎耳草科の互に近き屬の植物にして且つ土常山が *Hydrangea* のものなる關係に起因するなるべし。而して衛矛科 *Celastraceae* の *Celastrum orix* 或は櫻草科 *Primulaceae* の *Lysimachia* Sp. をも擧げたるものもあれども問題にあらず。

生 藥

市場に常山を求むるに、我國に於ては需要甚だ少きが如く、商品は豊富ならず、而して大體 2 種あり、時により又店により一定せざるが如し。共に支那より來るものゝ如く、全くコクサギにもクサギにも類せざるものなり。

甲は徑 1-2cm 位の木本莖にし皮部は多少光澤ある黃褐色を呈し縱條あり、外皮は大部分剝去され、僅に残れる枹皮は帶黃褐灰白色、材は黃色にして横斷面(第 2 圖 A)を検するに髓は畧ほ白く、髓線は淡黃色を呈し、縱斷面(第 2 圖 B)に於て髓線は褐色を呈して縦に列をなし處々斷缺して特異の紋理を呈す。是れ嘗てエイクマンのコクサギとしてベルベリンを検出したる常山と稱するもの(第 1 圖 A)にして、勿論全然コクサギにあらず。その形質構造メギ科 *Berberidaceae* のメギ *Berberis Thunbergii*, D.C. 又はナンテン *Nandina domestica* Tunb. の莖に酷似するものにして、此の如き植物によるもの常山に充てられたるを識らず。強いて之を求むれば本草和解の常山の附圖(2)に誌す色褐にして多刺といへるものに當るべきか。然らばメギに類する常山は既に元錄時代に存し今日に至れるを知る。即ち本生藥の細片 10g を採り 10% の醋酸水 100cc を以て 1 時間之を水浴にて浸出するに黃褐色の

第 1 圖

常山圖 A;B: メギに類する常山; A: エイクマンのベルペリンを検出せるもの, B: 現在市場に於て得たるものにして. その右のものは薄片となしたり. C, D, E: アデサイ等に近き構造を有する常山, 支那市場に普通にして我が市場にも見らるゝもの, C: 莖及根を交ゆる常山片, D: 葉及び若き莖よりなるもの, E: 材に多少黄色を帯びたるもの, F: 朝鮮に於て常山と稱するもの.

Various drugs of "Zyōzan" or "Ch'ang shan"

第 2 圖

第 1 圖 A の横斷 (A) 及縦斷 (B) 及び固 B の縦斷 (C) を示す。
 Enlarged sketch of the drug shown in the fig. 1. A, to show transverse (A)
 and tangential planes of section (B). C shows a tangential section of
 the drug, fig. 1. B. $\frac{8}{1}$

水溶液となる。次に之を濾過し水浴上に濃縮して 10cc となし、(1) その 1cc を試験管にとり 10% のヨードカリ溶液を滴加するに顯著に黄色の沈澱を生ず。又 (2) 別にその 1cc をとり加里鹼液を以てアルカリ性となしアセトンを加へ放置するに汚黄色の沈澱を見る。即ちベルベリンの反應明かなり。

又上のものに全く似て而も僅に縦斷面にあらはるる髓線の斷面が前者の如く著しく斷缺せらるる事なく(第 2 圖 C)却て更にメギに近きもの(第 1 圖 B)あり。

思ふにクサギの莖を黄染して常山に偽するものとみなされたるものは是等の生薬に起因せるにはあらざるか。而して本生薬は勿論常山として認むべからざる事は明かなり。

乙は眞の常山として信じ得べきものにして民國及び本邦に於ける支那漢藥商の嚮ぎ、又我が漢藥市場にも存するもの；嘗て我が教室に於てもエイクマンの報告により常山よりベルベリンを得んとしたれども遂に之を得ざりしは本品によれるものにして、エイクマンが偶然にも贗物たる前者を入手して前述せるが如き結果を生みたるものなり。

本品の市場に見るものは薄片或は細片としたる木片にして、(第 1 圖 C) 重に主根よりなり根に近き莖及び枝根を混す。又原植物は同一にしてその若き莖及び葉の混じたるものは別用ありて賣らる。莖は太きも徑 1.5cm 内外、髓はよく發達しその直径の $\frac{1}{2}$ 以上に達するものあり、根に於ては髓は存せず、且つ原植物は數 cm

の徑を有するものの如し。材は帶褐黃白色にして比較的緻密なれども軽く、年輪は明かならず。白く顯はるる髓線は根に於ては細かく細胞は2-3列にして高さも10數層位なれども莖に於ては第一期のものは幅數列にして高さは計るべからず甚だ顯著なり(第3圖A, B, C)。袍皮は淡灰褐色軟かくして剝離し易し。皮部は灰黃白色にして木部に接する部分は灰褐色を呈す。但し葉と共に用ひらるる若き莖に於ては剥ぎ易き部分を去れば灰綠色をあらはすを見る。若き莖も殆ど上皮は不完全に認めらるるを以て毛茸の有無を判定し難けれど、黒褐色を呈する葉は之を適當の方法を以て廣げ(第1圖D)檢するに披針形鋸齒縁にして短毛密生す。その形質構造 *Hydrangea* に似且つ *Dichroa febrifuga* の記載に通ずる所あり。即ち本生藥の原植物こそ *D. febrifuga* にあらざるか、その正邪は後日 *D. febrifuga* を得て本生藥と比較し決定する所あるべし。

尙本生藥に似て材多少黃く一般に細少にして髓も前者程發達せざるも(第1圖E)のあり。果して原植物を前者と同じくするや否やは疑問なりとす。

別に朝鮮に於て常山と稱するもの(第1圖F)はイバラ科 *Rosaceae* のヒトヘノシジミバナ *Spiraea prunifolia* S. et Z. を原植物となすと稱するものれども、形質全く異なり何によりて之を常山にあてたるものなるか全く不明なり。

第 3 圖

第1圖Cに示す常山の莖の横斷(A)縦斷(B)及び根の横斷(C)と縦斷(D) ^{8/1}

Enlarged sketch of the drug shown in the fig. 1, C, which is regarded to be the true "Zyōzan" or "Cháng Shan", to show transverse (A) and tangential (B) section of stem and root (C), (D).

結 論

此處に於て考ふるに常山にコクサギをあてたるは海州常山のクサギより發して

字義の誤りよりクサギの苗轉じてコクサギとなりたるものにして問題とするに足らず。又クサギは海州常山にして眞の常山にあらず。而してヤマアデサイ、アデサイ等 *Hydrangea* の類の多く擧げらるるは、その原植物が *Hydrangea* に類せるものなりし事考へらる。是は偶々矢野宗幹氏が長崎に得られたる、徳川時代支那より輸入したる藥用植物の苗を寫生せしめたる圖中に常山苗一株として描けるもの、その木立ちによつて見るも首肯さる。是れ即ち *D. febrifuga* なりしならむか。本植物は邦産なきを以て、嘗ては也末宇都岐等の名を附したるものなるべし。而して *D. febrifuga* は印度より支那南部に分布するものの如きも、常山の産地は中尾萬三氏によれば支那の文獻上北方に位すべきが如しと雖も、支那内地の植物的調査は未完なるを以て南方に産する *Dichroa* が北方に産せずと斷ずべからず、又往時本草は北方に起れるを以て、其藥品も亦多く北方に盛なりしものと考へらるるも本邦に渡る所のものは交通上多く南方のものなるを以て此の *Dichroa* を渡せるものと考察し得べく、若し北方常山の産地に於て實地探藥せば之等を明瞭に決し得べし。

以上説きたる所によつてみれば此處に俄に *Dichroa febrifuga* を常山の原植物

として決定すべからずと雖も、敢て否定すべき點を認めず、反て當れるものの如し。
又エイクマンのベルベリンを検出せる常山は誤れる常山にして、且つコクサギにも非る事を再び此處に斷言するものなり。

該研究に當り諸種の意見を寄せられ又は文献を示され或は材料を給されたる牧野富太郎氏、白井光太郎氏、矢野宗幹氏、本田正次氏、緒方正資氏、久内清孝氏、特に常山蜀漆產地考を寄せられたる中尾万三氏、及び終始懇篤なる指導と諸種の便宜を與へられたる恩師朝比奈教授に茲に深甚なる謝意を表し、產地考を附す。

(昭和3年6月25日 東京帝國大學醫學部藥學教室に於て)

常山、蜀漆產地考

藥學博士 中尾 万三

M. Nakao: On the geographical distribution of "Zyôzan
(Ch'ang Shan)" and "Shokushitsu (Shu Ch'i)".

常山と蜀漆とは神農本草經分ちて兩條と爲す。然るに陶弘景之が注解を施し、蜀漆は常山の苗なりと爲す。此より以後常山と蜀漆とは同一の植物に基くものとなし、本草綱目に於ては併せて一條とす。而して常山もとの名は恒山にして吳普の本草には恒山と誌せり。吳普は三國魏の人なるを以て三國の時には猶ほ恒山と稱し、漢文帝の諱を僻けて常山と爲すとの説は當らざるものの如く、恐らく唐穆宗の諱を僻けて常山とせるもの當れるが如し。若し恒山なる古名が恒山なる山名より來れるものとせば古代常山の產地は直隸省眞定府附近となる。然るに常山、蜀漆共に其產地を後に述ぶる如く眞定或は正定の附近とせざるは古代に謂ふ常山と後世に稱する常山とが原植物を異にする爲めなる可きか、此の如き點は詳細に考證すべからずと雖、常山も地名を取り蜀漆も亦蜀なる地名を取るとせば此の兩者の間に何等かの差異あるを想はしむるものあり。而も陶氏は同一植物と爲す。例令ひ兩者植物を異にするにしても其區別は陶氏を去る遠き以前にありしなる可く六朝梁の時には同一植物として取扱はれしを想ふべし。尙ほ名醫別錄には此等の產地を誌せるが、陶氏は其引用の原著を明記せざるを以て時代を明確に知り難きも恐くは吳普の本草の如きものを採録せりと想はるるが故に原植物を同一と爲す説は六朝の初めより存するものと推察し得べし。而して名醫別錄に誌す產地は兩者に於て相似たるを以て原植物を一つと爲す説は必ずしも新しきものに非ずと知る可く、又た初めより同一植物にして常山の苗が蜀に産する漆に似たる爲め、別に苗に對して蜀漆なる名稱を付すること恰も葶藶の苗を稱して藤蕪と稱するが如くなる可